銃後の農村、兵士の憂鬱

～ Edward Thomas の "As the team's head-brass" ～

吉　田　文　美

序

英国では特に第一次世界大戦に従軍した詩人たちを指して、"war poets" と呼び慣らわす。エドワード・トマス (Edward Thomas, 1878-1917) は、その中でも多くの人々に愛読されてきた詩人である。現在は詩人としての評価が高いトマスだが、その著作の大部分はエッセイや書評、伝記などの散文作品で、詩作をした期間は短い。エドナ・ロングレー (Edna Longley, 1940-) 編注の *The Annotated Collected Poems* によると、トマスが詩を作った期間は死の直前の約 2 年間、1914 年 12 月から 1917 年 1 月だった ("Biographical Outline" 324)。その短い間に、今も読み継がれる 140 編あまりの詩を残したことは、驚異的なことである。エドナ・ロングレーの夫でもある北アイルランド詩人マイケル・ロングレー (Michael Longley, 1939-) も、アンドリュー・モーション[(1)] 、ジョン・ストルワージ[(2)] との対談で、トマスの詩を次のように評価している。

> The 140 poems he [Edward Thomas] wrote in the last two years of his life are a miracle—one of poetry's great mysteries. Nowadays Thomas's presence seems to be everywhere: 'the past hovering as it revisits the light'[(3)].
> ("War Poetry: A Conversation" 265)

> 生涯の最後の 2 年間に彼 [エドワード・トマス] が書いた 140 編の詩は、奇跡—詩の大いなる神秘の一つだよ。現在では、トマスはあちこちで取り上げられているように思える。「光を再訪するように漂う過去」というわけだ。

詩人マイケル・ロングレーが「奇跡」と呼ぶほど、トマスが 2 年間で残した詩は完成度が高く、近年では更に注目度が上がっているのである。ここでは、そ

の「奇跡」の中から第一次世界大戦中の英国の農村風景を描いた"As the team's head-brass" (1916) を取り上げ、*The Annotated Collected Poems* におけるエドナ・ロングレーの注釈を参考しながら、その解釈を試みる。

I

まずは、"As the team's head-brass" の全文をロングレー編 *Annotated Collected Poems* から引用する。

As the team's head-brass

As the team's head-brass flashed out on the turn
The lovers disappeared into the wood.
I sat among the boughs of the fallen elm
That strewed an angle of the fallow, and
Watched the plough narrowing a yellow square
Of charlock. Every time the horses turned
Instead of treading me down, the ploughman leaned
Upon the handles to say or ask a word,
About the weather, next about the war.
Scraping the share he faced towards the wood,
And screwed along the furrow till the brass flashed
Once more.
                The blizzard felled the elm whose crest
I sat in, by a woodpecker's round hole,
The ploughman said. 'When will they take it away?'
'When the war's over.' So the talk began—
One minute and an interval of ten,
A minute more and the same interval.
'Have you been out?' 'No.' 'And don't want to, perhaps?'
'If I could only come back again, I should.
I could spare an arm. I shouldn't want to lose
A leg. If I should lose my head, why, so,
I should want nothing more. . . . Have many gone

From here?' 'Yes.' 'Many lost?' 'Yes: a good few.
Only two teams work on the farm this year.
One of my mates is dead. The second day
In France they killed him. It was back in March,
The very night of the blizzard, too. Now if
He had stayed here we should have moved the tree.'
'And I should not have sat here. Everything
Would have been different. For it would have been
Another world.' 'Ay, and a better, though
If we could see all all might seem good.' Then
The lovers came out of the wood again:
The horses started and for the last time
I watched the clods crumble and topple over
After the ploughshare and the stumbling team.
(Thomas, *Annotated Collected Poems* 123)

馬たちの真鍮飾り

馬たちの真鍮飾りが方向転換で光ったとき、
恋人たちは森へと姿を消した。
私は休閑地の一角を塞ぐ楡（ニレ）の
倒木の枝に腰かけ、プラウ[(4)]が
ノハラガラシの黄色い四角を狭めていくのを
眺めた。私を踏みつぶすことなく
馬たちが方向を換えるたび、農夫はハンドルに
寄りかかり、ものを言ったり尋ねたりした。
天気のこと、次には戦争のこと。
土地を掘り起こし森へと向かい、
畝にそって回転して、真鍮飾りが
また光る。
　　吹雪が倒した楡の木、その頭頂部の、
キツツキの丸い巣穴のそばに、私は座っていた。
農夫は言った。「そいつをいつ除けてくれるんだろ？」
「戦争が終わった時さ。」　そこで会話がはじまった–

一分話して、十分の間が空き、
もう一分長く話して、そして同じ間合い。
「出征したことは？」「いいや。」「で、たぶん行きたくない？」
「戻って来られさえするなら、行くべきだろ。
手の一本ならくれてやるよ。足をなくすのは
いやだな。頭をなくすとしたら、そりゃもう、
何も望みようがないし…このあたりじゃ大勢
出征したかい？」「ああ」「大勢亡くなった？」「かなりな。
今年は農地で動いているプラウは二組だけさ。
仲間の一人は死んじまった。フランスでの
二日目に殺された。この前の三月だが、
その夜に吹雪も来たんだ。あいつが
今ここにいてくれたら、木を片付けていたさ。」
「そして、僕もここに座ってなかったはず。全ては
違っていただろうね。この世は別の世界だったかも
しれないから。」「ああ、もっとましな世界さ。でも
俺たちに全てが見えるなら、全体はまともに見えるかもな。」
そのとき恋人たちが森から出て来た。
馬たちは進みはじめ、最後に
プラウの刃とよろめく馬たちの後ろで
土塊（つちくれ）が砕けて崩れるのを見た。

“As the team’s head-brass” は、トマスが残した詩の中でも広く読まれている作だ。この詩に描かれた情景を思い浮かべるには、実際にプラウを引く農耕馬の姿を見ておく必要があるだろう。前頁の写真は、Nicholas Roe が *Telegraph* のインターネット版で報じた、英国農耕馬コンテストの記事からの画像である。元の画像はカラー写真だが、ここでは誌面の都合上、モノクロで印刷した。この写真の team[5] は、コンテスト用の馬装をしているが、プラウを引く馬の様子を知る参考にはなるだろう。トマスの詩に登場する農耕馬たちは、この写真の馬たちほど凝った馬装はしていないと思う。しかし、詩の冒頭の部分から、トマスの農耕馬も、写真の馬と同じく head-brass と呼ばれる、真鍮の飾りを額に装着していることがわかる。プラウを引く馬たちの額の真鍮飾りが、方向転換をするたびにきらめく。そんな情景描写で始まる作である。

まずは、この詩の背景について整理をしておこう。ロングレーは、この詩の創作時期を 1916 年 5 月 27 日と特定している。その翌日 5 月 28 日付けの手紙で、トマスが妻のヘレンに宛てて、以下のようなことを書いているからである。

> I set out [from Hare Hall camp] with a meal in my haversack for a long walk, but didn’t go more than 6 miles all day. I sat down a good deal, both in the fields and at an inn, and passed or was passed by the same pair of lovers 3 or 4 times. It was very pleasant too, warm and cloudy. I wrote some lines too and rewrote them.
> (“Notes”, *The Annotated Collected Poems* 300; originally cited by Huws in “Edward Thomas’s private writing”)

> [Hare Hall の宿営地から] 背嚢に食糧を入れて長い散歩に出かけたが、丸一日で 6 マイル[6] 以上は進めなかった。野外でも宿でも腰を下ろすことが多く、同じ恋人たちを追い抜いたり、逆に追い越されたりを 3、4 回繰り返した。とても快適な日でもあり、暖かく曇っていた。いくらか詩を書き、それを書き直した。

当時のトマスは、ロンドン東部の邸宅 Hare Hall を宿営地とする Artists Rifles[7] の第 2 砲兵大隊に所属していた。前年の 7 月に、3 人の子を持つ 37 歳の父親でありながら、志願入隊したのである。Hare Hall では、地図の読み方を教える教官として働いた (“Biographical Outline,” *The Annotated Collected Poems* 326)。トマスは若い頃からイングランドの田舎を愛し、「長い散歩」を習慣にしていたが、入隊してからも休日には気ままな散歩に出かけていたようだ。

妻への手紙では、のんびりと野歩きに出かけた様子しか語られていない。しかし、ロングレーによると、この時に創作された "As the team's head-brass"は、入隊後のトマスの葛藤が織り込まれているという。当時のトマスは、戦争で死ぬのを恐れる一方で、内地勤務では飽き足らず、ヨーロッパの戦場に赴きたいという焦燥に駆られていた。この詩が書かれてまもない 1916 年 6 月 9 日には、友人エリノア・ファージョン[8] に、"I have been trying for an artillery commission but without military influence it looks as if I might have a long wait." 「砲兵隊の将校に志願しているが、軍にコネがないと長く待たされるかのように見える」 ("Notes", *The Annotated Collected Poems* 300) と書き送った。同年 7 月には、将校としての訓練を受けることが認められ、9 月の時点では、ロンドンの Royal Artillery School (国立砲兵学校) で士官候補生としての訓練を受けていた。ロングレーによると、砲兵学校で 38 歳のトマスが海外勤務を無理強いされた形跡はない。しかし、トマスの方は、1916 年の半ば以降は、明らかに「変化」を求めていらだっていたという。8 月 15 日には、友人のロバート・フロスト[9] 宛の手紙で、 "This waiting troubles me. I really want to be out." 「こんなに待つことで、私は苛立っている。本当に出征したいのだ。」 ("Notes", *The Annotated Collected Poems* 300) と述べていた。同年 10 月 29 日にも、ウォルター・デ・ラ・メア[10] への手紙で、"I hope I shall be preserved from Coastal Defence. I want a far greater change than I have had so far." 「沿岸防衛は免除してもらうことを希望している。これまでに経験したよりも、はるかに大きな変化が欲しい。」 ("Notes", *The Annotated Collected Poems* 300) と国外への派遣を期待する気持ちを表明している。トマスが希望どおりフランスに向けてサウサンプトン (Southampton) から出征したのは、翌年の 1 月 29 日。2 月 11 日には、西部戦線上にあるアラス (Arras) に配属される。一時期、司令部で勤務するが、3 月 9 日には、再びアラスで偵察部隊に配属された ("Biographical Outline," *The Annotated Collected Poems* 324)。ロングレーによると、フランスに渡った後も、司令部を出て砲兵中隊とともに前線に出ることは強要されなかったらしい。これを信じるならば、偵察部隊への配属はトマスが自ら志願したものと考えられる。そして、同年 4 月 9 日にアラスで戦死することになった。

次に詩の中身について、ロングレーの解説を要約したい。この詩はブランク・ヴァース[11] で始まるが、詩の語り手が ploughman (プラウを馬に引かせて畑を耕す農夫) と会話をはじめるあたりから、その詩型が乱れる。ロングレーは、トマスが定型をくずすことで、英国の農村に忍び寄る戦争の影を表現しようとしたと考えているようだ。また、5 行目および 35 行目で繰り返される "watched" 「見ていた」という単語は、戦争、または戦争により疲弊している農村の傍観

者であることを自己批判する気持ちが込められたものだと解釈する。

ロングレーの注釈で、特に興味深いのは、トマスにおいては、大陸で行われている「戦争」とイングランドの農村での「耕作」は必ずしも対立項ではない、場合によっては同一視しうるものでもあったと指摘している点である。根拠としてあげられるのが、戦争勃発前にトマスが書いたエッセイ *The Heart of England* における記述である。

> How nobly the ploughman and the plough and three horses, two chestnuts and a white leader, glide over the broad swelling field in the early morning! Under the dewy, dark-green woodside they wheel, pause, and go out into the strong light again, and they seem one and glorious, as if the all-breeding earth had just sent them up out of her womb — mighty, splendid, and something grim, with darkness and primitive forces clinging about them, and the night in the horses' manes.
>
> (Edward Thomas, Chapter II "Faunus" in *The Heart of England* 21; "Notes", *The Annotated Collected Poems* 300-301)

> 盛り上がる広い畑の上を、朝早く農夫とプラウ、そして三頭の馬たち—二頭の栗毛と先頭の白馬—は、堂々と滑走していく！朝露に濡れた深緑の森の影で、彼らは旋回し、停止し、そしてまた強い日の光の中へと出ていく。まるで血だるまになった大地が、その子宮から彼らを産み出したかのように、一体となり神々しく見える。力強く、輝かしく、そして何か恐ろしげなものとなり、彼らには暗闇と原初の力がまつわりつき、馬たちのたてがみには、夜が絡みつく。

耕作と出産のイメージを強烈に結びつけた上の文章は、トマスが土地を耕すことを母なる大地の体を切り裂く行為と捉えていたことを示している。ロングレーが言うように、「血だるまになった大地」のイメージから、農村の風景と戦争の惨禍が、トマスの頭の中で結びついたとしても不思議ではない。

ロングレーはまた、トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の "In Time of 'the Breaking of Nations'" の全文を引用した上で、トマスの "As the team's head-brass" は、ハーディの歴史観に挑戦するものだと解説している。ここでも、同じ詩をハーディの *The Complete Poems* から引用する。

In Time of 'The Breaking of Nations'

I

Only a man harrowing clods
  In a slow silent walk
With an old horse that stumbles and nods
  Half asleep as they stalk.

II

Only thin smoke without flame
  From the heaps of cough-grass;
Yet this will go onward the same
  Though Dynasties pass.

III

Yonder a maid and her wight
  Come whispering by;
War's annals will cloud into night
  Ere their story die.
(Hardy, *The Complete Poems* 543)

「国家の破壊」の時代に

I

ただ一人の男だけが土塊 (つちくれ) をハロー[(12)]で均す
　ゆっくりと静かに歩きながら
年老いた馬が一緒で、よろよろ、こっくりこっくり
　そっと歩きながら半分眠っている。

II

ただ薄い煙だけが炎もなしに
　シバムギを積んだ中から上がる
だが、こんなことが同じように続くだろう
　王朝は移り変わるけれども

III

あちらでは乙女とその連れが
　ささやきながら通り過ぎていく。
戦時年報は、曇って夜となるだろう
　恋人たちの物語が終わる前に。

ロングレーは、ハーディは「原型的な叙述 (archetypal narrative)」、つまり馬とともに畑を耕す農夫、連れ立って散策する若い男女といったイングランドの農村の風景を、「戦時年報 (War's annals)」、すなわち戦争がもたらす悲劇とは対象を成すものとして切り離しているとする。第2連目3〜4行目の "Yet this will go onward the same / Though Dynasties pass."を、「国を支配するものが変わっても、農村での営みは変わらず続いていく」と解釈しているのだろう。そのような解釈に基づくならば、ハーディは戦争の悲惨さを詠う一方で、農村での穏やかな営みが永遠に続くことを信じているかのように読めるからである。 私の "In Time of 'the Breaking of Nations'" についての解釈は、ロングレーとはいささか異なる。しかし、そのことは後で検討することにして、引き続きロングレーの解釈を確認していきたい。

ロングレーがハーディとトマスを対比する理由の一つには、"In Time of 'the Breaking of Nations'" が、いわゆる「銃後」のイングランドの農村風景を客観的に描き、個人的な感情が割り込む余地のない作品となっていることもあるだろう。ハーディの語り手は、戦時の侘しい農村風景について語るが、自身はあくまでも観察者としての立場に留まり、いわば「見えない存在」に徹している。それに対して、トマスの "As the team's head-brass" では、ロングレーの指摘どおり、詩の語り手本人が詩の風景の中に登場する。彼は耕作が行われている農地の一角で楡の倒木に座り込み、農夫と言葉を交わすのである。農夫の方もハーディの詩とは異なり、単なる観察対象に終わらない。語り手との会話を通じて言葉を発する。

詩の語り手と農夫の会話は、まず無難に天候の話から始まり、やがて戦争の話題になる。 "One minute and an interval of ten, / A minute more and the same interval." というところから、農夫が馬を止めて語り手と会話をする時間が、だんだんと長くなっていることがうかがえる。ロングレーは、「中断」「不在」「断絶」を連想させるイメージが、この詩の枠組みを形成していると考える。語り手と農夫が言葉を交わすことで、方向転換をしながら周回を繰り返すプラウの進行が中断されること、ブランク・ヴァースの韻律に割り込むように展開される2人の会話、手足の切断、吹雪で倒れた楡の木、戦争で亡くなった農夫の仲

間などが、ロングレーのいう「中断」「不在」「断絶」を連想させるイメージであろう。そして、そのイメージによって、ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" 第二節の "Yet this will go onward the same / Though Dynasties pass." で示されていた歴史の周期性、連続性が否定されているとロングレーは主張する。

また、"As the team's head-brass" には奇妙に激しい表現も含まれる。7行目の "Instead of treading me down" は、語り手の座っている場所に、勢いよく馬が迫ってくる様子を表すが、ロングレーによるとイングランドの農村が戦争とは無関係でないことも示す表現である[13]。確かに、この行を境に "As the team's head-brass" の語り手は、農村風景の傍観者としての立場に留まることを止め、見ていた風景の中に取り込まれ、その一部となる。さらに会話がはじまった後で農夫が発する "Have you been out?" という問いによって、語り手が軍服を着ている兵士であり、戦争と直接関わる立場の人間だということも示される。

詩の語り手は、詩の作者本人であるとは限らない。だが、この詩の語り手がトマス本人の代弁者であることは、ほぼ間違いがない。ロングレーによると、彼が農夫と交わす言葉、"I could spare an arm. I shouldn't want to lose / A leg. If I should lose my head..." については、トマスが 1915 年 11 月 21 日付けで叔母に宛てて送った手紙に、似たような趣旨の記述が見られるのである。

> I really hope my turn will come and that I shall see what it really is and come out with my head and most of my limbs.
> ("Notes", *The Annotated Collected Poems* 302)

> 私の順番が回って来て、実際の状況を見て、頭と手足のほとんどを失わずに抜け出して来られるならと本当に願っているのです。

この手紙をトマスが書いたのは、入隊から 4 ヶ月後、"As the team's head-brass" を書く 7 ヵ月前である。戦場に赴いて実際に起きていることを自分の目で見たいと思う気持ちとともに、ひどい怪我も負わず死ぬこともなく、無事に戻ってきたいという切実な願いが語られている。この手紙で語られた思いが、そのまま詩の中に盛り込まれたのであろう。

「手足、頭の切断」のイメージに関しては、トマスの編纂した *This England: An Anthology from Her Writers* (1915 年) [14] にも注目すべき台詞の収録があるとロングレーは指摘する。シェイクスピアの史劇『ヘンリー五世』 (*King Henry V*) からの台詞である。

But if the cause be not good, the king himself hath a heavy reckoning to make when all those legs and arms and heads, chopped off in a battle, shall join together at the latter day and cry all, We died at such a place . . .

("Notes", *The Annotated Collected Poems* 302)

そのかわり、大義名分がなけりゃあ王様自身がひどい責任をしょいこむことになるぜ、最後の審判の日には、戦場でちょん切られた足や腕や首がぞろぞろ集まってきて、「おれたちはしかじかのところで戦死しました」ってどなるだろうからな。

(小田島雄志訳『ヘンリー五世』 第4幕 第1場 131-132)

これは、アザンクールの戦い (Battle of Agincourt) 前夜に『ヘンリー五世』の端役の一人、兵士マイケル・ウィリアムズ (Michael Williams) が口にする台詞である。ウィリアムズは、下士官に身をやつしたヘンリー五世に向かって、相手が王とは知らないまま、この台詞を口にして、王に対する不信感を明らかにする。戦いが勝利に終わった後の第4幕第8場で、ヘンリーは正体を明かして、ウィリアムズの暴言を咎める。しかし、「陛下が私の思ったようなただの兵士であったなら、私はなんの罪も犯していなかったのであります。」(小田島 177) と言うウィリアムズに褒美を与えて放免する。

アザンクール (アジンクール) の戦いは、百年戦争中の1415年にフランスのアザンクールで行われた。ヘンリー五世がフランスのノルマンディーに侵攻し、勝利を収めた戦いである。『ヘンリー五世』は英国の劇作家シェイクスピアが書いたものだから、この侵攻を正当化する劇と思われるかもしれない。しかしながら、小田島雄志が『ヘンリー五世』に付した解説によると、この劇には「シェイクスピア作品特有の玉虫色的な性格」がある。この史劇がヘンリー五世について、「彼の性格を称揚し、その仮借なき行為の正当性を容認する」とする批評もあれば、「いかに美名を着せて取りつくろおうとも、彼の遂行する政略戦争の残虐行為を唾棄し、作者が伝えようとしている (あるいは無意識のうちに伝える) 作品のアイロニーを強調する」とする批評もあるのだ (小田島 224-226)。アザンクールの戦いは、数の上では遥かに劣っていた英軍が、弓兵を効果的に使って華々しい勝利を収めたものとして知られる。一方で、この戦いを含めたノルマンディーへの侵攻では、多くの英軍兵士の命が失われた。最初に上陸した時は重騎兵約2,500名、弓兵7,500名だった英軍の兵士数は、アザンクールの戦いまでには、重騎兵900名、弓兵5,000名までに減っていた。対する仏軍は20,000人を越える規模だった (Cannon 10)。上記のウィリアムズの台詞は、

多くの同輩を失い、数の上では絶望的と思える戦いに直面した兵士の悲痛な恨み節だったのである。戦争に「真っ当な」大義名分がないのなら、戦没者は死んでも死にきれないだろうとするウィリアムズの台詞には、トマスの心情に通ずるものがあったのか。農夫の "And don't want to, perhaps?" という問いに対して、行くべきだろうが、できれば手を片方失うくらいで生きて帰りたい、と語り手が答える。この生々しいやり取りには、戦場に行くとしても、命まで犠牲にすることは何としても避けたいと思うトマスの本音が、率直に語られていると考えていいだろう。

語り手だけではなく、彼と会話を交わす農夫も、ハーディの詩に登場する農夫とは違って、戦争と切り離された存在ではないとロングレーは言う。戦死した仲間 "One of my mates" について語る部分から、農夫の方も兵士となることが可能な年齢の男性であると暗示されるので、その見方は妥当と思う。"One of my mates" は、農夫と語り手 (おそらくトマス自身) の両方の alter ego であると、ロングレーは説明する。この場合の alter ego は、「他の自分」つまり、「ありうる自分」の意味と思われる。農夫と語り手の会話に垣間見える不安—出征すれば、自分たちもあっけなく死ぬ運命かもしれないという不安—を説明するには、悪くない言い方だろう。

「仲間」がいてくれたなら、倒木は片付けられていただろう、と農夫が語るのに続いて、語り手の方が、その時は自分もここには座っていなかっただろうと答え、"Everything / Would have been different. For it would have been / Another world." と続ける。表面的には、この部分は "if / He had stayed here" という仮定節に続くが、言外には「戦争がなかったら」という、もう一つの仮定がある。ここで、使われている "another world" という言葉については、ロングレーはトマスの唯一の小説 *The Happy-Go-Lucky Morgans* (1913) からの一節を引用するのみにとどめている。

> Ann says there is another world. "Not a better," she adds firmly. "It would be blasphemous to suppose that God ever made anything but the best of worlds. Not a better, but a different one, suitable for different people than we are now, you understand, not better, for that is impossible, say I."
>
> (From Chapter 20 of *The Happy-Go-Lucky Morgans* No. 6206-6208; "Notes", *The Annotated Collected Poems* 302)

アンは、別の世界があるのだと言う。「もっとましな世界じゃないのよ。」と彼女は断固として言い添える。「神様が世界を一番ましなものにしなかっ

たと思うなんて、冒涜でしょ。もっとましな世界じゃなく、違うものなの。今の私たちとは違う人たちにふさわしいものよ。わかるでしょ。もっとましな世界じゃないわ。だって、そんなの不可能でしょ。」

The Happy-Go-Lucky Morgans のアンは、当主が別の一族に代わっても同じ邸宅で働き続ける料理人である。上の引用は、*The Happy-Go-Lucky Morgans* の最後で、彼女が自分の生きた人生を振り返りながら、「他のもっとましな世などありえなかった」と語る場面からのものである。戦争勃発前に書かれた *The Happy-Go-Lucky Morgans* での "another world" は、現状に満足して、それ以上を求めまいとする気持ちを表明するために使われていた。しかし、"As the team's head-brass" では、それとは逆の「もっとましな世界があったはず」という恨めしい気持ちを表すのに使われている。この点に注目せよ、ということなのだろう。

詩の終盤では、冒頭で森の中に姿を消した恋人たちが再び姿を見せる。ハーディの囁きを交わし合う恋人たちとは違って、トマスの詩の恋人たちは、単に森から出て来たと述べられるだけである。これについてもロングレーは、恋人たちの存在が歴史の繰り返しを保証するものではないことを示しているとする。恋人たちの再登場を合図にしたように、語り手と農夫の会話も終わり、馬たちは進みはじめる。そして、語り手は、「最後に / プラウの刃とよろめく馬たちの後ろで / 土塊（つちくれ）が砕けて崩れる」のを見るのである。

ロングレーは、この「最後に (for the last time)」という言葉にも、特別な注意を向け、この言葉には様々な含みがあるとする。この詩に、"The Last Team" という題を付けることをトマスが考えていたことが、その根拠の一つである。"for the last time" という言葉には、詩の語り手が倒木に腰掛けた傍観者の立場を捨て、「ここから出征していった」人々の一人になる可能性を暗示する。話し相手の農夫にも耕作していた田畑を捨てて、兵士となる可能性がある。さらにロングレーは、第一次世界大戦に赴いたのは、人間だけではなかったことにも言及する。多くの馬たちも戦争のために徴用されて海を渡り、そしてそのほとんどが戻ってこなかった[15]。農業の近代化により、馬にプラウを引かせる耕作は、イングランドの「伝統的な」農村風景とともに消え去りつつあったが、戦争はそれに拍車をかけたのである。

The war changed farming practices. The teams of plough horses which were once a familiar feature of the landscape had been taken for service in France. Many were blown up along with the gun-carriages they pulled through the

Flanders mud. Instead, in the wake of the newly invented tank, tractors and steam ploughs belched and rumbled across English fields.

(Dakers 19; the underlined parts are cited in "Notes", *The Annotated Collected Poems* 302)

戦争は、農耕のやり方を変えてしまった。かつての農村風景では、おなじみものだったプラウを引く農耕馬たちは、フランスでの軍役に徴用された。馬たちの多くは、フランダース地方のぬかるみの中で引いていた砲架車とともに爆弾で吹き飛ばされた。かわりに、イングランドの田畑では、新発明の戦車に続いて登場したトラクターや蒸気エンジンの耕運機が、煙を上げてブンブン動き回っていた。

トマスは、詩の中の農耕馬たちにも徴用される可能性があると意識していたのだろうか。ロングレーは、"time" が最終行の "team" と韻を踏む(16)ことにも注目し、もしかすると農耕馬たちに残された時間も残り少ないと、暗示されているのかもしれないと推測する。詩の冒頭部では、真鍮飾りを煌めかせながら、語り手を踏みつぶさんばかりの勢いで進んでいた馬たちは、最後の方では農作業で疲れたのか、よろめくように進んでいく。確かに、その疲れきった農耕馬の様子と、戦場でぬかるみに足を取られ、よろめきながら進む軍用馬の姿とを重ねることも可能だろう。

この詩の解説の最後で、ロングレーは「トマスはハーディの始めたところで終わっている」と述べる。ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" では、よろめきながら (stumble)、土 (clods) を均す馬は最初に登場するが、トマスの "As the team's head-brass" では、それらの言葉は最後の方で登場する。トマスはハーディの使った言葉を再構築することで、自らが詩に書いた農村風景が、戦争や歴史と切り離されたものでなく、強く結びついたものであることを明らかにした、とロングレーは結論している。

II

エドナ・ロングレー編の *Edward Thomas: The Annotated Collected Poems* は、エドワード・トマスの詩を読む者にとっては、現時点で最良の手引書のひとつである。トマスの全詩、懇切丁寧な注釈、トマスの略歴、参考文献リストが掲載され、トマス研究の足がかりとなる重要な一冊だ。この本の注釈には、まだ

手書き原稿の形でしか存在しない文献からの引用も数多く提示される。手書き原稿へのアクセスが困難な読者にとっては、大変にありがたい。これほどの労作を目前にすると、彼女が提示する解釈に異を唱えることは、いささか気後れがする。しかし、この労作を真に生かすためにも、個々の作品についてのロングレーの解釈を吟味し、再検討することは重要なのではないかと思う。

"As the team's head-brass" の注釈では、すでに述べたように、ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" が比較の対象として取り上げられていた。しかし、後者に関しては、ロングレーとは違った解釈も可能と思う。繰り返しになるが、ロングレーによると、"In Time of 'the Breaking of Nations'" における農村の風景は、戦争がもたらす悲劇とは対象を成すものとして切り離されているとされていた。しかし、私には、ハーディの描く侘しい農村風景が、第一次世界大戦の惨状と繋がりのないものとして描かれたとは考えられない。

"In Time of 'the Breaking of Nations'" の題名は、旧約聖書の『エレミヤ書』第51章20節に由来する (Hardy, *The Complete Poems* 543 footnote)。Oxford Poetry Library のハーディ選集 (Samuel Hynes 編) の註によると、ハーディ自身がこの詩に付けた注釈には以下の節が引用されているという (Hardy, *Thomas Hardy* 244)。

> Thou art my battle axe and weapons of war:
> for with thee will I break in pieces the nations,
> and with thee will I destroy kingdoms;
> (Jeremiah 51:20, *Bible: King James Version*)

> 汝は我が戦斧、我が兵器である。
> なぜなら汝にて我は国々を粉々に砕き、
> 汝にて諸王国を滅ぼすからだ。

旧約聖書の『エレミヤ書』(Jeremiah) は預言の書のひとつであり、預言者の言葉を借りてイスラエルの神が民に呼びかける形を取っている。上の部分は、バビロンとカルデアの殲滅をイスラエルの民に呼びかけるくだりの一部で、以下のように続く。

> And with thee will I break in pieces the horse and his rider;
> and with thee will I break in pieces the chariot and his rider;
> With thee also will I break in pieces man and woman;

and with thee will I break in pieces old and young;
and with thee will I break in pieces the young man and the maid;
I will also break in pieces with thee the shepherd and his flock;
and with thee will I break in pieces the husbandman and his yoke of oxen;
and with thee will I break in pieces captains and rulers.
(Jeremiah 51:21-23, *King James Version Bible)*

そして汝にて軍馬と騎兵を打ち砕き、
そして汝にて戦車とその操縦者を粉砕しよう。
我はまた汝にて男も女も打ち砕き、
そして汝にて老いも若きも粉砕し、
そして汝にて若者も乙女も打ち砕こう。
我はまた汝にて羊飼いと羊たちを粉砕し、
そして汝にて農夫と耕す牛を打ち砕き、
そして汝にて軍師と統治者を粉砕しよう。

"break . . . the nations" という言葉を詩の題名に選んだ時、ハーディは上に引用した『エレミヤ書』第 51 章 21 節から 23 節の部分も読んでいたはずだ。これらの節には用語こそ違うが、ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" に登場するもの、つまり農夫と田畑を耕す動物 (聖書では馬ではなく牛だが)、若者とおとめへの言及があるからだ。『エレミヤ書』では、戦争で滅ぶものは、戦闘に直接参加する「軍馬と騎兵」や「戦車とその操縦者」だけではない。戦闘には参加しない「若者とおとめ」、「農夫と耕す牛」も戦争で滅ぼされる対象とされている。『エレミヤ書』のこの部分を読んでいたハーディなら、武器を持たない「若者とおとめ」や「農夫と耕す牛」のことも、戦争と関わりのない存在と捉えていなかった、戦争で粉々に砕かれて滅ぶものの範疇に入れていたのではと思う。

また、"In Time of 'the Breaking of Nations'" が創作された経緯を考えると、第 2 連の "this will go onward the same" が、「(時代が移っても) イングランドの農村での営みが変わらず続いていくだろう」という意味に解釈してもいいものか、疑問が生じる。The Penguin Poetry Library のハーディ選集 (David Wright 編) によると、ハーディはこの詩について、次のようなことを語っている。

I have a faculty . . . for burying an emotion in my heart or brain for forty years, and for exhuming it at the end of that time as fresh as when interred. For

instance, the poem entitled "The Breaking of Nations" contains a feeling that moved me in 1870, during the Franco-Prussian War, when I chanced to be looking at such an agricultural incident in Cornwall. But I did not write the verses till during the war with Germany of 1914, and onwards.

("Notes" in Hardy, *Selected Poems* 431)

私には、ある才能がある...40年の間、心または頭の中に感情を葬って、その40年が経過したところで、葬られた時と同じくらいにその感情を鮮やかに掘り起こす才能だ。例えば、『国家の破壊』と題した詩の中には、1870年の普仏戦争(17)の頃に、たまたま同様の農作業をコーンウォールで見ていて、私がかき立てられた感情が含まれている。しかし、私は1914年以降続いたドイツとの戦争期間まで、その詩を書かなかった。

1870年といえば、ハーディは、まだ30歳になったばかりである。当時は建築士として働いており、古い教会の改築のためコーンウォールのセント・ジュリオット (St. Juliot) を訪れている。そこで最初の妻エマ・ギフォードに出会う ("Chronology" in Hardy, *Thomas Hardy* xxv; "Hardy's Life and Works" in *Selected Poems* 8) 。エマと出会ったコーンウォール滞在中に、 ハーディは "In Time of 'the Breaking of Nations'" で描いた光景も目撃したのである。

On the day that the bloody battle of Gravelotte was fought they [Hardy and Emma Gifford] were reading Tennyson in the grounds of the rectory [at St Juliot]. It was at this time and spot that Hardy was struck by the incident of the old horse harrowing the arable field in the valley below, which, when in far later years it was recalled to him by a still bloodier war, he made into the little poem of three verses.

("Notes," *Selected Poems* 431; the original text is from Florence Emily Hardy, *The Early Life of Thomas Hardy*)

血なまぐさいグラヴロットの戦い(18)が行われた日に、彼ら [ハーディとエマ・ギフォード] は、セント・ジュリオットの牧師館構内でテニソンを読んでいた。ハーディが下の谷間の耕作地を年老いた馬がハローで均している作業に感銘を受けたのは、この時、その場所でのことだった。そして、はるか後年になって、もっと血なまぐさい戦争で、その光景を思い出した時、それを三節の短い詩にしたのであった。

普仏戦争は、第一次世界大戦以前にヨーロッパで起きた戦争としては、かなり大規模なもので、多くの犠牲者を出している。その様子を伝え聞いたハーディは、目の前で行われている農作業と戦争の悲惨さとを対比して、強い感銘を受けたのだろう。しかし、普仏戦争に英国が参戦しなかったことを考えると、当時のハーディには、その感銘を直ちに詩に記すほどの切迫感はなかったのではないか。英国が主導したボーア戦争 (1899-1902) の間に発表された詩集 *Poems of the Past and the Present* (1901) の冒頭で、"War Poems" という項を設けて 10 編あまりの作品を収録しているのとは対照的である。1870 年に目撃しながらも彼の心の中に「葬られた」農村の風景が蘇ったのは、多大な犠牲者を出したボーア戦争の後で、再び多くの兵士を他国に送り出す第一次世界大戦が勃発したときだった。

1870 年から 1914 年の大戦勃発までには、40 年以上が経過している。その間に英国の王位は、ボーア戦争中にヴィクトリア女王(ハノーバー家最後の君主)からその息子エドワード七世（サクス・コバーク・ゴーダ家の最初の君主）に引き継がれ、さらに大戦前の 1910 年にはジョージ五世へと渡った。"Though Dynasties pass" という言葉は、直截的には、英国での君主の変遷を指すと考えられる。このように国王が入れ替わっても、続いていく「このようなこと (this)」が、平穏に続く農村の営みであるならば、一抹の希望があるかもしれない。しかし、実際には、その農村の営みは連綿と続いていくどころか、衰亡の危機にさらされていた。"In Time of 'the Breaking of Nations'" の農村の描写を見る限りでは、ハーディがそのことに気づいていなかったとは、考えにくい。

トマスの "As the team's head-brass" の馬たちと比較すると、"In Time of 'the Breaking of Nations'" の第一節に登場する馬は、たった一頭で、しかも年老いている。トマスの馬たちは人を踏みつぶさんばかりの勢いでプラウを引くが、ハーディの老馬は、半分眠っているかのようにゆっくりとハローを引く。ハーディの農夫の年齢は明記されていないが、老馬とともに静かに進む様子から、老人であろうと推察される。第二節で語られる、炎もなしに上がる薄い煙 "thin smoke without flame" は、戦場での砲火と対比して、平穏な田舎の風景を暗示しているとも見える。しかし、何とも寂しげな光景を連想させる言葉でもある。ハローを引く老馬、炎もあげずに煙がうっすらと上がる風景は、田舎の平穏さを肯定的に描いているというよりも、戦争のために若い働き手や馬を徴用され、活気をなくし、疲弊した英国の農村の様子を強調しているように思える。農村を散策する恋人たちについても、男性の方に "wight" という、「人」以外に、「幽霊」や「霊魂」の意味もある言葉を使っていることから、心温まるものよりも、何か薄ら寒いものを感じてしまう。男性の方には、いずれ戦争に徴用され、戦

死する可能性があることを暗示するように思えるからだ。もちろん、2 行あとの “night” と押韻する単語を選んだだけと単純に考えることもできる。だが、その “night” も、戦死者の名で戦時年報が埋め尽くされる様子を示す隠喩として使われている。おそらく、この恋人たちの物語の終わりは、男性が出征するか戦死する時なのではないかと想像させる。その時には、すでに戦地で多くの命が失われているのだ。

ハーディが “In Time of ‘the Breaking of Nations’” で採用している形式にも注目する必要があるだろう。この詩で採用されているのは、バラッド形式の変形である。通常のバラッド形式は、iambic tetrameter (弱強調四歩格 / 1行8音節) の行と iambic trimeter (弱強調三歩格 / 1 行 6 音節) が交互に繰り返される。この作品では、第一節こそ定式どおりのバラッドだが、続く節では音節の欠落が増えていく。第二節の 1 行目と 4 行目、第三節の 1 行目、2 行目、4 行目が 1 音節だけ短くなっているのである。徐々に欠落を増やすことで、戦争が長引くにつれ、失われるものが増えていく様子を暗示しているのではないだろうか。また、短い詩行をさらに削ぎ落すことにより、個人的な感傷を排することに成功していると評価できる。

題名の元になった『エレミヤ記』の記述、ハーディが最初に着想を得た時から作品の成立までに戦争が繰り返し起きたこと、詩の中の用語、および形式によって喪失感が強調されていること。以上を合わせると、ハーディが「続いていく」とする “this” は、平穏な農村の生活ではないと思われる。戦争が繰り返されること、および繰り返し起きる戦争によって多くの命が犠牲となること、その結果、農村の疲弊が進み、人馬が田畑を耕すような古風な光景が失われていくこと、これらが連続する負のスパイラルを指しているのではないかと思う。

結　論

以上のように、ハーディの詩の解釈を修正する必要はあると考えるのだが、それをした後であっても、ハーディの詩とトマスの詩が鮮やかな対象を成すことには違いない。トマスの詩では、複数の馬が勢いよく農地をプラウで掘り起こすが、ハーディの老馬はただ一頭のみ、静かにハローで土を均す。トマスの語り手は詩の中の風景の登場人物でもあるが、ハーディの語り手は、「目に見えぬ」傍観者の立場に徹する。トマスの農夫は語り手と会話するが、ハーディの農夫はもの言わぬ存在である。トマスの詩には、悩みながらも戦場に赴く決意を固めようとする兵士の心情が語られる。対して、ハーディの詩からは感傷的

な要素は排され、語り手は個人の感情を語らない。しかし、ハーディの年老いた人馬は、1915 年当時に 75 歳であったハーディ自身の立場を象徴しているように思える。自分より年若い人々が次々と戦場に出て行く中、後に残って孤独に詩作を続けざるを得ない老詩人の思いが、ただ一人、年老いた馬とともに田畑を耕す農夫の姿に反映されているとも読める。

トマスの "As the team's head-brass" が、ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" が始まるところで終わっているとするロングレーの指摘は、最終的には正しい。トマスの詩とハーディの詩を並べると、トマスの詩に登場する人馬が戦争へと駆り出された後、後に残されたハーディの農夫が老馬とともに細々と農作業を引き継ぐしかないという、大戦当時の農村の風景が浮かび上がると思えるからだ。ロングレーが主張するように、トマスが "As the team's head-brass" で使った "stumble"、"clods" という言葉が、ハーディの詩を意識したものであることも、ほぼ間違いないであろう。しかし、それによって、トマスがハーディの詩に「挑戦している」というわけではないように思う。

ハーディは、英国の国策に表立って反対を表明することはなかったが、戦争をよしとする世論に迎合することはなかった。そのため、ボーア戦争中は、ボーアに同情的だと誹られることもあったという (University of St. Andrews, *Thomas Hardy and the Boer War*)。トマスもまた、志願入隊したものの、戦争については、あまり肯定的ではなかった。特に、ルーパート・ブルック[19] が "The Soldier" などの詩で提示した、国のために嬉々として死に赴く兵士の「理想像」には複雑な思いを抱いていた ("Notes", *The Annotated Collected Poems* 300) ようだ。飯田操によると、トマスは大戦当時の熱狂的な愛国心が、政治的に利用されていることに気がついていたという。

> 『最後の一束』(*The Last Sheaf*) に残されているこれらの記事によると、トマスは、ドイツ軍の上陸を恐れる住民、ドイツ軍の残虐を声高に語る市民、そして、大英帝国国民として我がちに入隊する人達、国のためにではなく飢えのために入隊する人達、面白半分で入隊する人達、更にはこの戦争の正当性を信じることができず入隊を拒否する人達、短い人生を静かに個人として生きようとする人達など、さまざまな人達の姿をできるだけ客観的に描きとどめようとしている。ただ、明確なことは、トマスがこの戦争に資本主義・帝国主義的な側面のあることを指摘していることである。この戦争は外的な理由によるより、むしろ内的なものであると述べ、資本家達が労働者を組織的に解雇し、入隊せざるを得ないようにしている側面があること、戦争について意見を言えば社会主義者

のレッテルをはられる風潮のあることを指摘している。愛国心が一部の者に功利的に利用されていることがトマスには我慢ならなかった。

（『エドワード・トマス：人とその詩』 190）

このようなトマスには、戦争に批判的な目を向けていたハーディと相通ずるものがあったのではないかと思う。

しかし一方で、第一次世界大戦当時、70歳を超えていたハーディと、かろうじて志願入隊が可能な年齢で、実際に入隊してしまったトマスとでは、立場が違う。戦争と農村の疲弊に対して、似かよった鬱屈した気持ちを持っていたとしても、それをどんな視点から捉えるかという点では、大きな差があったはずだ。75歳のハーディは、生涯の間、大きな戦争が何度も繰り返されるのを見た。そして、多くの命を犠牲にして繰り返される悲劇を、年老いた人馬と侘しい農村の風景に託して象徴的に描いた。すでに述べたように、"In Time of 'the Breaking of Nations'" の語り手は、個人の感情を語らず「傍観者」の立場に徹している。実際のところ、第一次世界大戦当時のハーディは、戦争に直接関与できる年齢でなく、彼より若い世代の人々が次々と出征していくのを見送ることしかできなかった。ハーディ自身も、そのような自分の立場を自覚していたのではないか。そして、戦争が繰り返されることに対する彼個人の悲憤を、ただ一人、老いた馬とともに農地を耕す農夫のもの言わぬ姿に封じ込めたのだろう。それに対して、38歳のトマスは、あっけなく自分の将来が断ち切られるかもしれないことを恐れる兵士の立場にいた。ハーディの作を意識しつつも、銃後の農村風景を描く時、トマスはこれから戦場に赴く者としての複雑な思いを語らずにはいられなかったのではないか。戦地に行く決意を固めながらも、死を恐れずにはいられないという矛盾した気持ち、果たして生きて帰れるのかという憂鬱で不安な気分が、"As the team's head-brass" に反映されたのだと思う。

トマスの "As the team's head-brass" は、ハーディの "In Time of 'the Breaking of Nations'" と同じく、第一次世界大戦中の「銃後」の英国の農村を描き、戦争に対する鬱屈を表明する詩である。しかし、これから戦争に赴く一兵士であったトマスは、ハーディのように「傍観者」に徹して個人の感情を抑えたスタイルをとることはしなかった。詩行の長いブランク・ヴァースを基調とした "As the team's head-brass" は、その中に登場人物の会話を割り込ませることで、語り手の心情を生々しく描き出す。同じ「銃後」の農村を描きながら、この二つの詩が形式も語り手の役割も対照的な作となったのは、トマスが後輩詩人として意図的にハーディを超える作品を書こうと試みたからというよりも、一兵士としての個人の心情を仔細に描くには、この形式、この語りを選ばざるを得

なかったというのが正しいのではないだろうか。

Notes（註）

(1) Andrew Motion (1952-): イングランドの詩人、小説家、伝記作家。1999 年から 2009 年には英国桂冠詩人であった。

(2) Jon Stallworthy (1935-2014): イングランドの詩人、文学研究者。

(3) the past hovering ... the light: トマスの詩 "It rains" からの引用。

(4) plough (plow): 農機具の日本語名称については、北海道総合政策部知事室広報広聴課『北海道デジタル図鑑』を参照した。

(5) ここでは、プラウや馬車などを引く 2 頭以上の馬を指す。

(6) 約 9.65km

(7) 1859 年の創設時に、多くの芸術家が関わったことで知られる銃兵部隊。

(8) Eleanor Farjeon (1881-1965): イングランドの児童文学作家、詩人。

(9) Robert Frost (1874-1963): 米国の詩人。フロストは、評論家としてのトマスが高い評価をしたことがきっかけで名声を得た。一方で、トマスが詩作を始めたのは、フロストの強い勧めによるものだったとされている。

(10) Walter de la Mare (1873-1953): イングランドの詩人、小説家。

(11) blank verse: 無韻詩。英語詩では、特に弱強五歩格、つまり「弱音節＋強音節」の組み合わせが 5 組、計 10 音節で 1 行を作る詩型で書かれたものを指す。

(12) harrow: 日本語名称は、(4)と同じサイトを参照。

(13) 飯田も「吹雪のために倒れたニレの大木や、作者を踏みつぶさんばかりに迫ってくる馬の勢い、これらには戦争の暴力と破壊が暗示されている。」としている（『エドワード・トマス：ラフカディオ・ハーン –翻訳と研究–』168)

(14) *This England: An Anthology from Her Writers*: イングランドについての様々な作家の記述を収録したアンソロジー。

(15) 第一次世界大戦時に徴用された馬を描いた作としては、マイケル・モーパーゴのジュブナイル小説『戦火の馬』(*War Horse*) が有名である。この小説はスティーブン・スピルバーグ監督で、2012 年に映画化されている。原作の邦訳に付けられた解説によると、第一次世界大戦では、徴用された 200 万頭の馬が死んだ。生き残った馬たちもほとんどが、本国に輸送するには費用がかかりすぎるとの理由で、イギリス政府により食肉用としてフランスの肉屋に売られた（モーパーゴ 204)。

(16) ただし、詩行の最後で子音のみが一致する slant rhyme（half rhyme)、つま

り半押韻である。完全な脚韻は、詩行の最後で母音または母音＋子音が一致する。

(17) プロイセン=フランス戦争とも称する。

(18) 普仏戦争中で最大規模の戦闘。1870 年 8 月 18 日に行われた。

(19) Rupert Brooke (1887-1915): 第一次大戦に志願して出征し、1915 年 4 月 23 日に戦地で病死した。エドワード・トマスとは個人的に親しい友人であった。

***Works Cited and Consulted*（参考資料目録）**

[English]

Bible: King James Version. <http://www.sacred-texts.com/bib/kjv/index.htm> *Internet Sacred Text Archive.* <http://www.sacred-texts.com/index.htm> March 15, 2015.

Cannon, John. *The Oxford Companion to British History.* Oxford University Press, 1997.

Dakers, Caroline. *The Countryside at War 1914-1918.* Constable & Co. Ltd., 1987.

Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy.* Ed. James Gibson. Macmillan, 1976. Paperback Edition, 1982.

----------. *Selected Poetry: The Penguin Poetry Library.* Ed. David Wright. Penguin, 1978.

----------. *Thomas Hardy: Oxford Poetry Library.* Ed. Samuel Hynes. Oxford University Press. 1994.

Huws, Daniel. "Edward Thomas's private writing." *The Edward Thomas Fellowship Newsletter*, No. 27. p. 4. August 1992. The Edward Thomas Fellowship. http://www.edward-thomas-fellowship.org.uk/ March 19, 2015.

Longley, Edna. "Edward Thomas (1878-1917)." February, 2005. http://www.warpoets.org/poets/edward-thomas-1878-1917/ *The War Poets Association.* http://www.warpoets.org/ March 15, 2015.

Longley, Michael, Andrew Motion, Jon Stallworthy. "War Poetry: A Conversation." *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War.* Ed. Santanu Das. Cambridge University Press. 2013. 257-267

Poetry Foundation. <http://www.poetryfoundation.org>

"Edward Thomas: Biography." Revised 2013.
<http://www.poetryfoundation.org/bio/edward-thomas> March 10, 2015.

Roe, Nicholas. "British National Ploughing Championships brings young farmers down to earth." October 1, 2009.
<http://www.telegraph.co.uk/news/earth/countryside/6248229/British-National-Ploughing-Championships-brings-young-farmers-down-to- earth.html> *The Telegraph (Telegraph Media Group Ltd.*, UK)
http://www.telegraph.co.uk/ March 1, 2015.

The Friends of the Dymock Poets (FDP). <http://www.dymockpoets.org.uk/>
"Edward Thomas" <http://www.dymockpoets.org.uk/Thomas.htm>
March 10, 2015.

Thomas, Edward. *Edward Thomas: The Annotated Collected Poems.* Ed. Edna Longley. Bloodaxe Books, 2008. Reprinted 2013.

----------. *The Happy-Go-Lucky Morgans. Complete Poetical Works.* Delphi Classics, 2013. Version 1 (Amazon Kindle Version). No. 3338-6209.

----------. *Selected Poems and Prose.* Ed. David Wright. Penguin, 2013.

----------. *The Heart of England.* London: J. M. Dent, 1909. Amazon Kindle Version.

University of St. Andrews. *Thomas Hardy and the Boer War.*
<http://www.st-andrews.ac.uk/~pvm/HardyBWar/>
Last modified September, 2001. March 18, 2015.

Varlow, Sally. *A Reader's Guide to Writers' Britain.* Prion Books, 1996.

Williams, Merryn. "Thomas Hardy (1840-1928)."
http://www.warpoets.org/poets/thomas-hardy-1840-1928/
The War Poets Association. http://www.warpoets.org/ March 15, 2015.

[Japanese]

飯田操 『エドワード・トマス：人とその詩』 文化評論出版 1988 年

---------- 『エドワード・トマス：ラフカディオ・ハーン –翻訳と研究–』
文化評論出版 1990 年

小田島雄志 (訳) ウィリアム・シェイクスピア 『ヘンリー五世』
Shakespeare, William. *King Henry V.* (白水 u ブックス) 白水社 第 1 刷：1983 年 10 月 第 11 刷：2006 年 1 月

草光俊雄 『明け方のホルン：西部戦線と英国詩人』 みすず書房 2006 年

北海道総合政策部知事室広報広聴課　『北海道デジタル図鑑』
<http://www1.hokkaido-jin.jp/zukan/index.html>　2015 年 3 月 1 日
----------『100 の物語 [歴史] 農具：きびしい農作業を助けた、明治・大正時代の農具』 <http://www1.hokkaido-jin.jp/zukan/story/02/18.html/>
2015 年 3 月 1 日
モーパーゴ、マイケル　『戦火の馬』　Morpurgo, Michael.　*War Horse*.　1982.
佐藤見果夢 訳　評論社　2012 年